

子どもの子供による子どものための教育

3年2組9番 河合 和花

1. はじめに

子どものための教育とは何だろう？私が日々の学校生活の中でよく感じていることだ。学校教育は本当に子どものためなのかとも思う。みな一度は「人の為に」という言葉を聞いたことがあるだろう。一見聞こえはいいが、これを漢字で書くと「偽り」と書いて「いつわり」と読む。この言葉はまさに日本教育の現在の姿だと思う。どういうことかと言うと、今の教育は人なりも詳しく知らない大人が子どものためにという体で大人にとって都合のいいことを教えているということだ。その教育の中で大人たちに、子どもは育まれていくはずの芽をご丁寧に摘み取られていく。私は子どもが自分達のためと思える教育であってほしい。子ども視点の子供主体の教育に興味を持ち調べてみた。

2. 序論

するとハイテックハイというアメリカの高校が出てきた。今からそのハイテックハイの特徴についてお話ししよう。まず、ハイテックハイはチャータースクールである。(※チャータースクールとは貧しい家庭の子などが多く在籍しており、運営費は公費で賄われている。)また、授業のベースが問題解決型学習だ。問題解決型学習とは課題を発見し、みんなで意見をシェアして、また個人の知識を増やし探究を深め、そしてまた意見をシェアするというこの過程を繰り返してそこから得られた研究結果を発表したり、問題解決の行動を起こすというものだ。学びが長期的に組まれている。その問題解決型学習をしていくための長期的スパンとは、例えば日本では各クラスに担任がいて、クラス替えが一年に一回あるというものが多い。そしてこのクラス替え制度によってどうしても学習内容が1年間に収まるように組み立てられてしまう。またそれは問題解決型学習に比べて先生主体の授業であることも示している。その結果学びの幅が狭まり、研究も浅いものとなり、自然と勉強が作業、動作化して質の低下へと繋がりうる。ここで皆さんに伝えたいことがある。問題解決型学習をするなら子供の主体性が必要になること、反対に子供視点の子供主体の学びにしたければ、問題解決型学習をする必要がある。つまりこの二つのことは、相互に関係している。

3 本論

そこで私は日本にもハイテックハイ教育を取り入れたいと考えた。ただ、海外の教育を何でもかんでも外から真似るとはちょっと問題があるのではと思うかも知れないが、着目すべきはそこではないのだ。海外の教育を真似るといふところに着眼するのではなくて、子供主体の子供視点の教育を取り入れるという点に着眼することだ。と言っても日本の教育全体にハイテックハイを導入すると考えるのはあまりにもスケールが大きすぎて難しい。そこでまずは取り入れる地域、範囲を限って簡単に置き換えやすくなる仮説を考えた。それは、私たちが通っている国際高校にハイテックハイを導入するには どうすれば良いのか？ということである。そして今から具体的な案を提起していく。まず現在の課題点、改善すべき点を見つけ出し、そこからハイテックハイ式スタイルを考えた。まず今の学校生活において何か不満に感じていることがあるか？学校の学年合同の交流会でアンケート調査を行った。すると多くの人が課題と感じていることが大きく分けて二つあった。一つは制服の着こなしである。

ここでは、「スカートをなぜおって短くしたらいけないのか」や、「セーター登校はなぜだめなのか?」、「セーターは着用してもいいのにベストはなぜ校則違反になるのか?」と言った声が寄せられた。スカートの丈で言うと、昔スケバンが流行った時はスカートをながくしてはいけないという校則が出来たこともあった。でも現代で言うと短い丈で着こなすのが流行りだから膝上にしてはいけないという校則が設けられている。このようにその時々状況を見てルールを作っていると言える。だがその流行というものを基準にしてしまうと校則で言うと何が正装として扱われるのか?という問題になると思う。ではなぜ学校はこのようなルールを作るのかという疑問が生まれる。それは学校という組織が作った一つの模範に限ることで簡単に万人を同じ方向に導くことができるからだ。この組織に個人が従わなかった場合、それは校則違反になる。校則違反をした場合、学校内では責任を負うことになる。また、ルールに従うとは責任を学校という組織に託すことでもある。しかし一歩社会に出たならば、全ての責任を自分で背負うことになる。そこで社会の規範に直結したものにするために、制服の着こなしの規範を取り払うことを推奨する。もし基準とする規範を取り去った場合、今まででいう正解というものがなくなる。そうなれば各々が思うものを表現することになる。それによって本来人にどうこう言われる筋合いはないと思うのだが、(その自己表現によって他の誰かを傷つけることになったりするならばそれは自分で責任を負う必要がある)。ただそこから自分が背負っている責任を理解して、それを示す行動になって行くと思う。また制服の着こなしもファッションの一部だ。ファッションも一つの自己表現の方法なのでそれは他人が一律の規則で制御するようなことでもないのだ。ただし一つルールを作るとすれば、「他の誰かを直接傷つけないこと」だろう。

二つ目は授業スタイルである。今行われている授業では大学受験で通用するための受験に直結した学習の内容になっている。だから基本的に授業で扱う問題は答えが必ず一つあって、それを先生の導きを元に一人で解き抜くといった形だ。でも社会では答えが一つとも限らず、また答えなんてあるのかどうかもわからない問いを仲間と一緒に解くという学びである。この二つの学びがある。前者は後者に比べて簡単なことだ。学ぶ方の人は導いてくれる人の教え通り一つの正解という答えを出すだけだからだ。ただこれは学ぶ側にとって問いを理解し、深めるために行われていない。むしろ教える側が万人に一つしかない正解に導くことが簡単だからだ。言い方を悪く言えば指導者にとってつごうのいい容易なやり方なのだ。この社会と学校での学びに差異がある時点で社会において役立つ、社会に直結した学びではないということである。本来根本的に教育改革をするならば、そもそもの現在の教育を辞めるべきだ。全員が同じ速さで進んでいくわけではなく個人差がある。そもそも社会では物事理解を深めたり、先に進むとき同じ速さで進んでいく人はいないのだ。ただ学校教育ではその本来なら固有であるはずの学習速度や深度を足並みを揃えて全員が形状できているようにしている。しかし、現在なされている毎年度進級する制度を今すぐ変えることは容易ではない。また先ほど述べたことと矛盾しているが、時間をかけて全員が同じ深度までわかるようにするという事は社会において必要ではない。これは今までの教育の象徴から皆がオールマイティーに出来なければならないというものを示している。そうではなくて今後必要とされていることは、自分ができないことを無理に出来るようにするのではなく、他の誰かの力を合わせてお互いになかった部分を埋め合わせていき補うというものだ。こっちの方がよっぽどこれから相応しい学びである。そこで、私が提案するのが、教育の根本をグループワークにするということだ。これならすぐにでも取り掛かれることだと思う。そのグループ内でそれぞれが自分ができることをやり、苦手なところは取り組まないということではなく、一

度は挑戦し、お互いにない部分を補うということ意識して学ぶのだ。元来授業の中で答えまで導くのは教師という形でしたが、これからは教えられるもの、つまり生徒同士教え合いお互いに導き合うのだ。そうすることで先生に教えられたことをそのままこなすという受動的な意識から自ら学ぶ姿勢、能動的な意識への改革に繋がる。協調ではなく、調和が大切である。



4. 結論

つまりハイテックハイの教育を学校に導入することは、社会に直結した教育にすることだ。今世の中に蔓延している新型コロナウイルスの感染拡大を機により社会体制の変動が続いている。その先の読めない社会で生きていくには学校の中の社会も柔軟に変化していくことが望まれる。

そこで私はハイテックハイを国際高校に導入することを推奨する。

だがそこで二つ誤解されやすい問題がある。ひとつは海外で行われていることを何でもかんでも取り入れて日本の固有性を無視して押し進めることだ。現代社会でもまた国際高校でも、グローバル化と謳われている。だが本当のグローバル化とは、多様性とは何を指すのだろうか。私は世界と繋がることももちろん大切だし、いい経験になると思う。だが今日グローバルという言葉に世界が焦点を当てているからその傾向が強いが、本来はローカルがあってこそそのものなのだ。しかしそこには目を向けていないという事実がある。極端に言えばグローバルだけが良いという風潮になっている。もう一度言うがグローバルとローカルは同じように重視されるべきことなのである。グローバル化を意識することはこれからの社会を形作る上で大切なことだと思うが、この様々な情報が行き交い、誰でも発信することができる社会だからこそ、目先の流行に流されて上っ面だけを見ていては何も進んでいないのと同じである。またシステムを取り入れることが目的になってしまうことだ。外界からのシステムを取り入れることが教育の発展だという短絡的な考えを持つのではなく、その先の社会を子

どもの持つ豊かな想像力で創造することだ。目的とは、子ども視点の、子どもが主役である教育を図ることだ。 私はこの意識を重視した上でハイテックハイの教育を取り入れたい。

5. おわりに

人は人生を送り沢山の経験を積むことによって、自分にとっての財産を築いていくと思う。だからこそ多くの気づきを得て人生を豊かにするにおいて子どもの頃に様々な視点で考えることはとても大切である。また大人になっても「子ども眼」を忘れないでほしい。また学校とは子どもが子どものままでいられる場所であってほしい。子ども視点で子どもが主体である教育であるべきだ。

6. 参考文献・出典

黒柳徹子 窓際のトットちゃん <https://www.amazon.co.jp/窓ぎわのトットちゃん-講談社文庫-黒柳-徹子/dp/4061832522>

Awesome Ars Academiaアメリカの公立校ハイテックハイとは。PBLについても詳しくご紹介 <https://awesome-ars-academia.net/high-tech-high/>